

埋蔵文化財センターロビーでの資料展示

埋文センターが発掘調査した朽木の遺跡

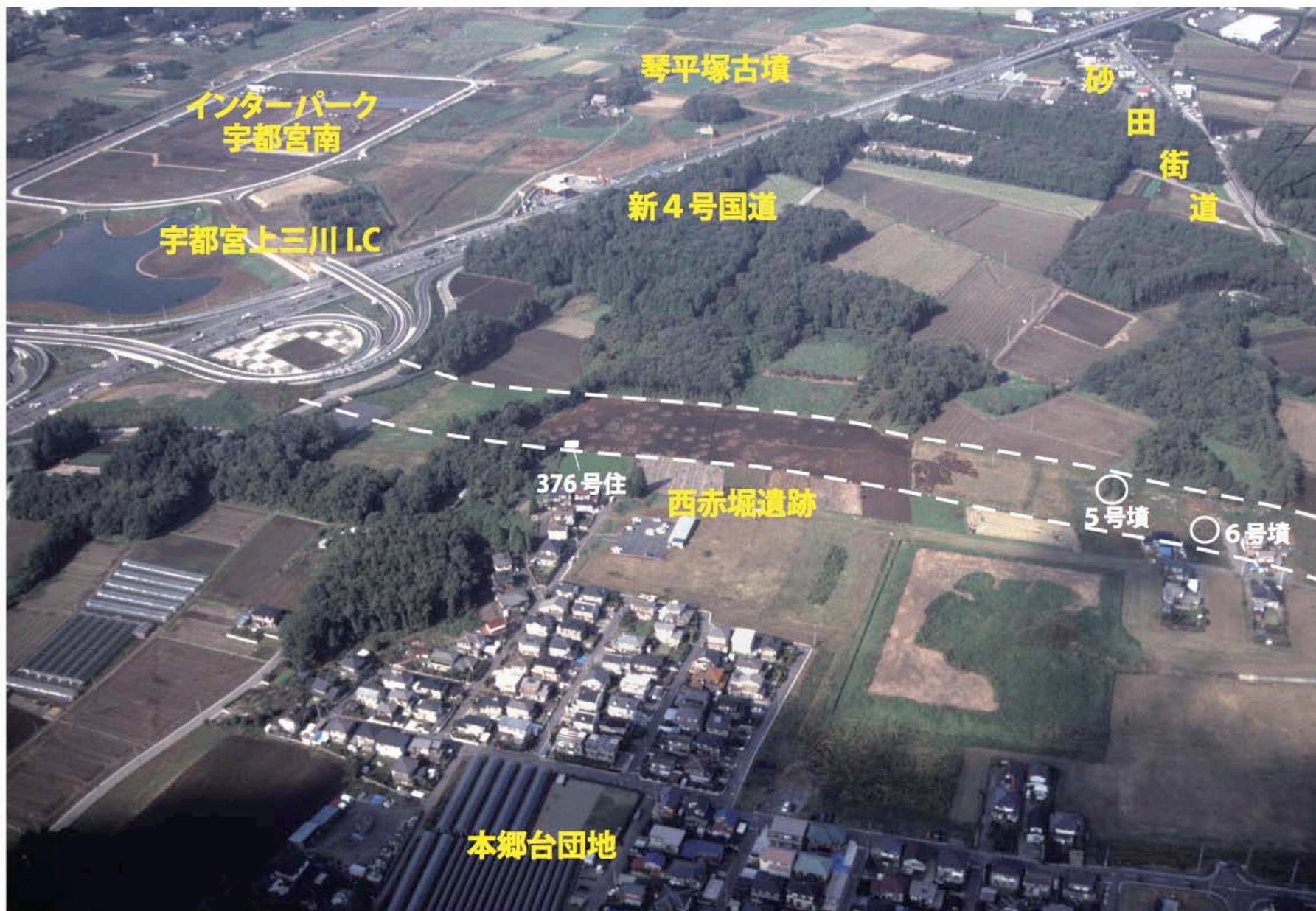
にしあかぼりいせき
西赤堀遺跡

にしふざかし
- 河内郡上三川町大字 西 汗 -

西赤堀遺跡は、宇都宮・上三川インターチェンジの東側に位置します。発掘調査は、平成13年度から15年度にかけて北関東自動車道の建設に先立って行われました。

その結果、調査区中央の低地（まいぼつだに埋没谷）をはさんで、西側からたてあなじゅうきよあと竪穴住居跡（59軒）やほったてばしらたてもものあと掘立柱建物跡（2棟）、井戸跡（4本）など古墳時代後期から奈良時代（今からおよそ1,400～1,200年前）にかけての集落跡、東側から古墳時代後期の有力者のお墓（古墳群）が見つかりました。

竪穴住居跡からは、当時使われていたつき坏・わん椀・かめ甕・こしき甑などの土器や、かま鎌やかなはし鉄鉗などの鉄製品、よ糸を燃るためのぼうすいしゃ紡錘車などが出土しました。また、古墳は周堀外側で直径30～35mの円墳で、死んだ人を入れる石の部屋（石室）からは、くつわ馬具（あぶみ轡・ちよくとう鐙）や刀（やじり直刀）・じかん鏃・耳環などの鉄製品が出土しています。



奈良時代の家から出土した古墳時代の鏡

この鏡は、一辺 7.5mほどの大型竪穴住居跡（376号住居）の西壁際の床面から出土したものです。「へんけい変形あし蕨手文鏡」と呼称される直径 8.6 cmの青銅製の鏡で、古墳時代（6世紀中頃）に製作されたものです。古墳時代の鏡は、単に顔や形を映すものではなく、権力の証あかしとして有力者が好んでもち、死者とともに古墳に副葬される例が多く、竪穴住居跡からの出土は極めて珍しい例です。

この住居は奈良時代（8世紀中頃）のもので、地名または人名を示す「財部たからべ□」の墨書土器をはじめ土師器の坏つきや須恵器の壺つぼ・坏ふた・蓋などの土器、鎌かま・鉄鉗かなはし・鏃やじり・刀子とうすなどの鉄製品などが出土しています。

つまり、古墳時代の鏡が奈良時代の住居から出土したということになります。約 200 年も古い鏡がどうしてこの住居から出土したかはよくわかりませんが、代々伝わったもの、周辺の古墳から盗掘してきたものなどが考えられます。

